

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530974

研究課題名(和文) 高度教職能力開発におけるナラティブ・カンファレンス法の教育的意義に関する研究

研究課題名(英文) Research on educational meaning of the narrative conference method for developing highly qualified competences of school teachers

研究代表者

庄井 良信 (Shoy, Yoshinobu)

北海道教育大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：00206260

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、臨床的な基礎研究として、生徒指導上及び学習指導上のケース・カンファレンスのデータが、エピソード記録として整理され、本研究の理論仮説が構築された。第二に、理論的な基礎研究として、ナラティブ・カンファレンス法の理論的枠組みと方法論に関する仮説が構築された。第三に、これらの基礎研究に基づいて、ナラティブ・カンファレンス法が高度専門職業人を養成するための教師教育カリキュラムの開発にとって持つ教育的意義が、臨床教育学の視点から明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：First, as a clinical research, significant data of case conferences on student guidance and instruction in episode mode were collected, and the fundamental theoretical hypothesis of this research was constructed. Secondly, as a theoretical research, the hypothesis on a theoretical and methodological framework of the narrative conference method was constructed. Thirdly, based on these fundamental research works, in the context of clinical research on human development and education, educational meanings of the narrative conference method for developing highly qualified competences of teachers were elucidated.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：ナラティブ カンファレンス 教員養成 高度専門職業人 現職教師教育 教育方法 臨床教育学

1. 研究開始当初の背景

(1) 臨床的実践力養成カリキュラム

高度専門職大学院（教職大学院）の発足、教員免許更新制度の政策的導入等、我が国における現職教師教育改革は、一つの重要な歴史的転換点を迎えている。

近年、内外の教育系大学・大学院では、現代的諸課題に応じるために、教員の養成・採用・研修システムの総合的な見直しが進められている。その多くは、現職教師の自己学習カリキュラム開発と不可分に進められようとしている。これらは、それぞれの固有なライフステージにおける現職教師の「理論と実践との高次の融合」をめざす教育学の諸研究とも密接に関連している。

これまで、日本教育学会の特別課題研究をはじめ、日本の教育界では、教員の養成カリキュラム改革に関わる諸課題が検討されてきた。しかし、現職教員のリカレント（生涯学習）と接続した現職教師教育改革のカリキュラムに関する研究は、必ずしも十分に展開されているとは言えない。また、現職教師教育の制度に関わる諸研究はいくつか生まれているが、その臨床的・実践的カリキュラム開発やその教育学的検討は、まだ十分に深められているわけではない。

(2) エピソード記述の臨床教育学的考察

一方、社会・文化状況の急激な変化に伴い、社会が要請する学校教育へのニーズも、複雑に多様化してきている。こうした複雑な状況変化に柔軟に対応する現職教員の高度な臨床的実践力の開発方法の研究は、今日、もっとも焦眉の課題の一つになっている。

申請者は、これまで、不登校、虐待・暴力、軽度発達障害のある児童生徒への発達援助の思想と方法を、具体的な教育実践のエピソード記述に基づいて考察する臨床教育学の方法を構築してきた。申請者の勤務校である北海道教育大学における教職10年目経験者研修や、大学院教育における臨床生徒指導特論・演習では、福祉・医療・教育という多分野を領域横断しあう多声的カンファレンスの運営技量の育成や、学校教育分野での具体的な臨床事例に基づく問題解決能力育成の在り方も考察しつづけてきた。

(3) 日本教育学会・科学研究費補助金・フィンランド調査

学術研究活動としては、申請者は、1999年から2001年まで、日本教育学会の課題研究委員会の一つであった「臨床教育学の動向と課題」の運営事務局を担当し、臨床教育学の視点から、現代社会における教職の専門性を問い直した。『臨床教育学序説』柏書房、2002年、共著。学校教師の高度職能開発については、2002～2005年まで、日本教育学会における特別課題研究委員会「教師教育の再編動向と教育学の課題」の構成員として参加しつ

つ、日本学術振興会の科学研究費補助金の支援を受けた共同研究「臨床教育学の展開と教師教育の改革」の運営事務局を担当し、理論と実践とを融合する修士論文指導の課題について考察した。『創造現場の臨床教育学』明石書店、2008年、共編著。

国際的には、フィンランドにおけるコミュニティを基盤にした現職教師教育カリキュラムの思想と方法の検討も行ってきた（『フィンランドに学ぶ学力と教育』明石書店、2004年、共編著）。現在は、日本教育学会特別課題研究委員会「現職教師教育カリキュラムの教育学的検討」の運営事務局も担当している。

以上のような、臨床研究、理論研究、国際的政策研究を背景に、申請者は、現職教師の高度な教職能力開発プログラムの根幹をなすカリキュラムの一つとしてナラティブ・カンファレンス法（“NCM”）のさらなる臨床的・理論的考察が必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現職教員の高度教職実践力を涵養するための教育方法の一つとして申請者が独自に開拓してきたナラティブ・カンファレンス法（Narrative Conference Method：以下、“NCM”と略記）の職能開発的意義を、継続的なケース記録と、その体験者への半構造化面接記録に基づいて、臨床教育学の視点から理論化することである。そのことを通して、今日、まさに喫緊の課題である「理論と実践とをより高い次元で融合する現職教師教育カリキュラムの臨床的開発」に貢献したいと考えている。

一つは、過去5年間、延べ128名の現職教員を対象に、蓄積してきたカンファレンス記録と、聴きとり記録（音声データ）をトランスクリプションに変換し、それらを臨床教育学の視点からコーディングした上で本研究の理論仮説（生成的問い）を構築したい。

二つは、本研究期間の3年間で、研究協力校へのフィールドワークと、フィンランド・オウル大学教師教育学部との国際的な共同研究を通して、多くの現職教師教育の現場で応用可能な“NCM”の国際基準の典型カリキュラムを臨床教育学の観点から構築したい。

3. 研究の方法

第1期（平成23年度）は、ナラティブ・カンファレンス法（NCM）が現職教師の高度な職能開発に果たす意義と役割に関する理論仮説（生成的問い）を構築する。

第2期（平成24年度以降）は、本学が研究協力協定を締結しているオウル大学教師教育学部・大学院との共同研究体制を豊かに展開しつつ、第1期に構築した“NCM”の理論仮説に基づいて、北海道における研究協力校（大都市と地方都市）への臨床的フィー

ルドワークに基づく“NCM”や、本学大学院を修了した現職教員との“NCM”を実施し、最終的には、多くの現職教師教育の現場（教職大学院等）でも応用可能な“NCM”の国際基準の典型モデルを臨床教育学の観点から構築したい。

4. 研究成果

まず、ナラティブ・カンファレンス法（NCM）が現職教師の高度な職能開発に果たす意義と役割に関する理論仮説（生成的問い）を理論的に構築した。具体的には、内外における研究資料を収集し、基礎理論を構築するために、以下の計画を実行した。

（1）：現職教師教育カリキュラムに関する内外の研究文献・資料の収集と整理を行なった。特に、日本教育学会の特別課題研究委員会（現職教師教育カリキュラムの教育学的検討）での資料収集によって、本研究課題に関する内外の研究動向を包括的に把握することができた。（2）：ナラティブ・アプローチを応用した質的研究法に関する内外の研究文献・資料（とくに臨床教育学に関連するもの）の収集と整理を行った。その成果は、北海道教育大学大学院の研究紀要に投稿・掲載された。

（3）：海外における研究資料収集として、ナラティブなアプローチを応用したカンファレンス型の学びに関する研究文献・資料の収集と整理を行うことができた。（4）：フィンランドのナラティブ・ラーニングに関する基本文献を翻訳し、その経過的な成果は、日本臨床教育学会の『臨床教育学研究』（創刊号）に投稿・掲載された。（5）：ナラティブ・アプローチを活用した「高度職能開発支援」に関する基幹コンセプトと臨床教育学のフィールドワークに基づく具体的な取り組みを、イタリアのローマで9月6日に開催された国際学会（ISCAR：International Society for Cultural and Activity Research）で、“Narrative learning intervention in an inner-city public school” というテーマで発表し、研究交流をおこなった。（6）：“NCM”フィールドワークを、檜山郡上ノ国町の小学校、北海道教育大学附属札幌小学校、札幌市内公立小学校で試行した。

研究実績の概要で述べたとおり、平成23年度当初に計画していた研究活動①～⑥は、ほぼ十全に遂行できた。とくにローマで開催された国際学会での発表には、国際学会誌から投稿を求める複数のオファーがあり、本研究の推進が国際的にも意義深いものであることが、いっそう明らかになった。さらに、カナダのナラティブ・インクワイアリー（narrative inquiry）の研究グループと、臨床教育学の国際的な共同研究の重要な契機もつくることができた。そのことをとおして、本研究課題である「高度教職能力開発におけるナラティブ・カンファレンス法の教育的意

義」に関する理論的・実践的な研究の基盤が、当初に構想していた以上に堅固なものになりつつある。また、実践的なデータ収集においても、現職教員が参画するナラティブ・カンファレンスの臨床的データも当初に予定していた以上に質の高いものとして収集・整理できはじめている。

次は、高度教職能力開発に資するナラティブ・カンファレンス“NCM”の実際を、教育現場における生徒指導上の実践事例（18件）や、学習指導上の実践事例（2件）への臨床的参画を通して蒐集した。また、この理論とその方法論的な枠組みを明らかにするために、内外における研究資料を蒐集し、その成果を国際学会等で発表した。具体的には、以下の研究活動を遂行した。

（1）：現職教師教育カリキュラムの改善に関する内外の研究文献・資料の収集と整理を行なった。（2）：対人援助・発達援助活動においてナラティブ・アプローチを応用した質的研究に関する内外の研究文献・資料の蒐集と整理を行った。（1）、（2）の成果は、日本教育学会の特別課題研究委員会（現職教師教育カリキュラムの教育学的検討）における報告書において「ナラティブ・ベースの教師教育カリキュラム開発の試みー北海道教育大学大学院における臨床教育学履修体験の考察から」という論文として発表した。

（3）：海外における研究資料収集として、モスクワ大学において「活動理論とナラティブ・アプローチ」に関する研究文献・資料の蒐集と整理を行うことができた。（4）：理論的な枠組みを精査するために、ナラティブ・ラーニングに関する文献を翻訳し、刊行の準備を進めることができた。（5）：臨床教育学のフィールドワークに基づくナラティブ・カンファレンスに関する日本での取り組みを、2012年7月にモスクワ心理教育大学（MSUP）で開催された国際学会（ISCAR）の夏季セミナーにおいて発表し、研究交流を行うことができた。（6）：“NCM”をベースにした臨床参画によるフィールドワークを、檜山郡上ノ国町の小学校、北海道教育大学附属札幌小学校、北海道内公立小学校で試行した。（7）：ナラティブ・カンファレンス法の教育的意義を「当事者研究」として深めるための集団インタビュー調査を実施した。

ナラティブ・カンファレンス法（“NCM”）が高度な教職能力開発においてどのような教育的意義を有するかという課題について、当初の計画以上に、理論的にも、実践的にも、深めることができた。

一つには、教育現場におけるフィールドワークとして、このカンファレンス法を応用・検証する機会が当初計画していた水準を超え、生徒指導上の実践では18件、学習指導上の実践では3件、総計21件（当初の計画の約1.5倍）のエピソード記録として蒐集することができた。具体的には、このカンファレ

ンス法をベースにしたフィールドワークを、北海道檜山郡上ノ国町の小学校、北海道教育大学附属札幌小学校、北海道内公立小学校で試行し、北海道教育大学札幌校における生徒指導のカンファレンス（18事例）として試行し、その裏付けとなるべきナラティブ・カンファレンス法の教育的意義を「当事者研究」として深めるための集団インタビュー調査を実施することができた。この展開も、当初計画以上の収穫である。

二つには、このカンファレンス法の理論的基礎付けの作業が、フィンランド、カナダ、ロシアという複数の国々の拠点大学との研究交流を通して多角的に進めることができた。当初予定していた国際的交流の枠組み（フィンランド）を越えてその理論の検証作業が深化している。具体的には、モスクワにおいて、活動理論とナラティブ・アプローチに関する研究文献・資料の蒐集を行い、ナラティブ・カンファレンス法の理論と実際に関する日本の取り組みを発表することができ、フィンランドのオウル大学の研究者との共同作業として「ナラティブ・ラーニング」に関する文献の翻訳が刊行予定となり、カナダのアルバータ大学で、臨床教育学とナラティブ・アプローチに関する情報交流ができた。

最後の研究成果は、三つの機軸で達成された。1つは、学校教育現場における参画研究（*interventional research*）の事例に関するデータ整理と臨床教育学的分析である。昨年度に引き続き今年度も、臨床的な実践参画研究を通して蒐集した生徒指導上の実践事例や学習指導上の実践事例を、子ども理解と発達援助のエピソード記録として整理した。今年度のエピソード記録と、その多声的カンファレンスに関するナラティブなりフレクションの記録は、生徒指導に関するものが13事例、学習指導に関するものが6事例（広島県で3事例、北海道で3事例）であった。これらの事例は、本研究の理論仮説構築とその応用の基盤となる貴重な基礎データとなった。

2つ目は、本研究の理論的な枠組みに関する国際的な視座からの考察である。今年度も、内外の研究調査を通して蒐集した理論的文献の整理を行い、ナラティブ・カンファレンス法（*Narrative Conference Method*：“*NCM*”）の背景となる理論的枠組みや方法論上の仮説を構築した。具体的には、日本臨床教育学会の第3回年次大会において、カナダのアルバータ大学のジーン・克蘭ディニン（*Clandinin, D. J.*）博士と研究協議を行い、ナラティブ・インクワイアリー（*narrative inquiry*）の思想と本研究の方法論との接点を探ることができた。また、元フィンランドのオウル大学のペンティ・ハッカライネン博士と、ナラティブ・ラーニングに関する翻訳とそれに伴う情報交流をとおして、ヴィゴツキーの知的伝統とそこから発展した文化歴史的発動理論における本研究の位置づけを再

検証することができた。

3つ目は、これらの基礎的な研究活動（臨床参画研究と国際的理論研究）に基づいて、ナラティブ・カンファレンス法（“*NCM*”）の高度職能開発機能について臨床教育学的な視点から分析し、現職教師の高度な職能開発カリキュラムの創造に資する要因を抽出したことである。これらの研究成果は、2013年9月に武庫川女子大学で開催された日本臨床教育学会第3回年次大会の課題研究において、「ナラティブ・カンファレンス—自己物語（*self-narrative*）と社会政策とのコンタクトゾーン」というテーマで発表した（招待講演）。また、2013年11月に北海道教育大学札幌校で開催された日本教育大学協会研究集会第2分科会「修士レベルの教育研究とその意義」において、「ナラティブ・カンファレンス・メソッド（*NCM*）による高度な教職能力の開発—臨床教育学の観点から」というテーマで発表した。また、今後は、日本教育方法学会や日本臨床教育学会等でも発表し、北海道教育大学大学院教育学研究科紀要『学校臨床心理学研究』にも投稿する予定である。

これらの基礎研究に基づいて、ナラティブ・カンファレンス法が高度専門職業人を養成するためのカリキュラムの開発にとって持つ教育的意義が、臨床教育学の視点から明らかにされた。

授業の構想や、ケアと発達援助の構想で、かけがえのない人格の動的な意味生成システムに触れ、その自己運動を呼び起こすために必要な教育のコンセプトが探究されなければならない。

ヴィゴツキーの情動理論の教育学的展開の〈環〉は、厳しい現実を受け入れ、見据えることをとおして生まれるファンタジーの構成原理だった。ヴィゴツキーの情動理論は、教育という舞台において、深い情動体験（*perezhivanie*）を伴う困難をも受け入れて生きるための虚構のリアリズムと現実変革のための構想的認識論（クリエイティブ・イメージネーション論）として、さらに洗練されていかなければならない。このような問題意識から、いま、フィンランド、リトアニア、ロシアと日本の臨床教育学との共同研究がはじまっている。

臨床教育学は、いま・ここで生じる唯一性の教育事象を対象化するが、それを、個別的で局所的な意味の世界（すなわち小さな物語）のなかに幽閉することを避け、それを実践や社会政策の批評やクリエイティブな提言（オルタナティブな政策提言）へと開いていかなければならない。それが、草創期の臨床教育学の重要な課題意識だったからである。危機を生きる尊厳ある他者が語る「小さな物語」（自己物語）を「大きな物語」へと結節する、あるいは、「大きな物語」をひとりの人間の「小さな物語」（自己物語）として豊穣化する方法論が必要である。

そのもっとも有力な舞台装置の一つが、物語を紡ぐ学び合い (narrative learning) をコンセプトにしたナラティブ・カンファレンスである。これは、教育実践の当事者の回想によって叙述されたエピソード記録 (臨床的な実践記録) に基づいて、そこに登場する他者理解 (子ども理解) に焦点を絞ることを通して、一回性の教育事象の多声的な共同解釈を遂行し、実践構想や社会政策へと繋いでいく一つの方法論である。それは理論と実践の往還を、実践の側からボトムアップする援助者養成カリキュラムの試みでもある。

ナラティブ・カンファレンス法は、大学院の「臨床生徒指導特別演習」や自発的な多職種カンファレンスを中心に展開した。

実践の概要は、以下の通りである。まず、現職教員によって観察・感受された経験にもとづいて、自己の体験 (experiencing) を、一つのエピソード (小さな物語) として言語化し、カンファレンスで共有できるテキストにする。そのテキストにもとづいて現職教員 (地域援助者) が自己の — しばしば危機を伴う — 経験を物語る (20 分程度)。カンファレンスの参加者は、その声を共存的他者の姿勢で、無条件の肯定的関心をもって徹底して聴きとる。

その後、語られた事実や、聴きとられることによって改めて回想された事実に基づいて、多声的な (polyphonic) なカンファレンスを行う。そのさい第一義的に意識を集中するのは、エピソードに登場する子ども (被援助者) の理解を深め合うことである。そのことを通して、カンファレンスにおける参加者のコミュニケーションは、責め合う様態ではなく、支え合う様態になる。そのナラティブな学び合いが創発する環境で、語り手と聞き手の自己物語 (self-narrative) が、質的に転換できるように支援するのが大学教員の役割になる。

このナラティブ・カンファレンス法の実践プロセスは、大学教員としては、教育実践に責任を持って関与している教師 (援助者) の自己物語 (self-narrative) を、臨床教育学という新たな学問の地平で浮き彫りにし、その語り崩しと語り直しを支援する営みでもあった。それは、当時に、大学教員である私にとっては、ある種の「教えほぐし」と「教えなおし」の過程でもあった。

大学教員から現職教員 (地域援助職) への一方的な啓発実践ではなく、大学教員と現職教員 (地域援助職) との双方向的な「学びほぐし」と「教えほぐし」の実践のなかにこそ、今日の現職教師教育カリキュラムのもっとも重要な「基準線」になると考える。

以上が、本研究の成果である。

右上のモデルは、臨床教育学からみたナラティブ・カンファレンス法の理念図である。



Fig. 1. Tentative Concept Map of JA-CROHD 2013 by SHOY

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

① 庄井良信「弱さと失敗をいとおしむく視線：まなざし」『教育』(教育科学研究会) 819, 2014, 5-12 (査読有)

② 庄井良信「海外事情：日本臨床教育学会第 1 回大会記念講演概要：ナラティブ・ラーニングと教師教育」臨床教育学研究, 2, 2013, 78-81. (査読無).

③ 庄井良信「ナラティブ・ラーニングの概念と研究デザイン：生成的実験法 (genetic experiment) の臨床的拡張を求めて」『臨床教育学研究』創刊特別号, 2012, 58-69. (査読有).

④ 庄井良信・内田雅志・正武家重治・齋藤知子・土田佳織・中根照子・畠山貴代志・廣瀬雄一「ナラティブ・アプローチによる現職教師(発達援助専門職)教育カリキュラム改革の試み」『学校臨床心理学研究』第 9 巻, 2012, 3-18. (査読無).

⑤ 庄井良信「ケアの専門性を考える」『日本の学童保育』442, 2012, 24-29. (査読無).

⑥ 庄井良信「海外関連学会の動向：ISCAR 国際学会 (ローマ大会) と臨床教育学」北海道の臨床教育学 (北海道臨床教育学会編) 1, 2012, 36-38. (査読無).

⑦ 庄井良信「フィンランドの教育 — 教師の尊厳とく高い専門性 > を支える政策」『学校運営』(全国公立学校教頭会編) 53(10), 2012, 12-15. (査読無).

⑧ 庄井良信「ナラティブ・ベースの教師教育カリキュラム開発の試み—北海道教育大学大学院における臨床教育学履修者の考察

から』『現職教師教育カリキュラムの教育学的検討』1 (日本教育学会特別課題研究委員会編) 2012, 131-140. (査読無).

[学会発表] (計9件)

① 庄井良信「ナラティヴ・カンファレンス・メソッド (NCM) による高度な教職能力の開発: 「臨床教育学」の観点から」平成25年度日本教育大学協会研究集会, 2013年10月5日, 北海道教育大学.

② 庄井良信「ナラティヴ・カンファレンス: 自己物語 (self-narrative) と社会政策とのコンタクトゾーン」日本臨床教育学会第3回大会, 2013年9月28日, 武庫川女子大学 (招待講演).

③ 庄井良信「フィンランドにおける教員養成・教師教育— 教師のライフ・カリキュラム・デザインを紡ぐ「省察」の特質」日本カリキュラム学会年次大会 課題研究Ⅳ: 教員養成の国際的動向」2012年07月08日, 中京大学 (招待講演).

④ Yoshinobu SHOY (2012) Narrative Poetics: Clinical-pedagogical expansion of Vygotsky's theory of emotions. In III International ISCAR Summer University in Moscow, 2012年07月04日~2012年07月04日, MSUP in Moscow, Russia (招待講演).

⑤ 庄井良信「自己物語 (self-narrative) の社会的詩学 — 臨床教育学の概念」日本臨床教育学会 2011年10月1日, 北海道教育大学. (招待講演)

⑥ Yoshinobu SHOY (2011) Narrative learning intervention in an inner-city public school. ISCAR Congress in Rome 2011年9月6日, Cavour Center, Rome (招待講演).

⑦ 庄井良信「他者に臨む「私」への根源的リフレクション」日本生活指導学会 2011年9月4日, 金沢大学 (招待講演).

⑧ 庄井良信「フィンランドにおける学力政策の現在 — 脱 PISA シンドロームから近未来学校 (future school) へ」日本教育学会 2011年8月26日, 千葉大学 (招待講演).

⑨ 庄井良信「臨床教育学の理論的枠組み — 臨床 (clinical) 概念の二重性と学術研究のアジェンダ」第1回北海道臨床教育学会 2011年7月18日, 北海道教育大学.

[図書] (計2件)

① 庄井良信『ヴィゴツキーの情動理論の教育学的展開』風間書房, 2013年, 総頁数 220.

② 汐見稔幸, 伊東毅, 高田文子, 東宏之, 増田修治, 庄井良信他『よくわかる教育原理』ミネルヴァ書房, 2011年, 総頁数 319.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

庄井良信 (SHOY, Yoshinobu)
北海道教育大学大学院・教育学研究科・教授
研究者番号: 00206260